

内藤昌先生のご逝去を悼む

河田克博

名古屋工業大学名誉教授、日本建築学会名誉会員で日本建築学会副会長もなされ、建築史学の構築・発展に大きく貢献された内藤昌先生は、二〇一二年一〇月二三日午後七時四三分、横浜の療養施設において老衰のため逝去されました。その数日前の一〇月八日に満八〇歳の誕生日を迎えたばかりでした。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生の最後のお勤めは、愛知産業大学学長・教授としての立場でしたが、二〇〇七年一月中旬に最終講義をなされた數十日後、脳梗塞で倒れられ、後遺障害で左半身不随となり、車椅子生活を余儀なくされました。お見舞いに行つたときには、頭脳は変わらず明晰でしたが、右手しか動かないのが本を読む事などもどかしそうでした。病院を退院後は、横浜のご自宅で療養生活を始められ、優しさのなかにも気丈なものをお持ちの奥様（内藤淑子）が献身的な介護をなされていました。その奥様が、二〇一一年一〇月にご自身の病気治療のため入院することとなり、自宅介護が出来なくなつたため内藤先生は先の療養施設に移られました。内藤先生にとって奥様は、最も頼りになり甘えられる存在だったものと思います。奥様と接することが出来なくなつてからは、内藤先生の気力が急激に低下していったことです。ご病気を治すために入院されて回復を期していた奥様でしたが、薬石効なく二〇一二年四月下旬に他界されました。それを境に、内藤先生はさらに衰えていき、現今超高齢といえないお歳ながら老衰による逝去となりました。

内藤昌先生は、長野県のお生まれで（以下、「内藤昌著述目録」）（一九九三年）と筆者の記憶による）、一九五一年に東京工業大学理工学部に入学、一九五五年に同学部建築学系を卒業された後、同大学大学院へ進まれ、修士課程を経て、一九六〇年建築学専攻博士課程を修了、「書院造における間の建築的研究」にて工学博士を授与されました。その後、昭和女子大学講師（一九六〇年）、東京工業大学助手（一九六一年）を経て、一九六三年名古屋工業大学建築学科助教授として赴任されました。内藤先生の東京工業大学時代の思い出話として、直接の恩師の城郭建築研究で名声高い藤岡通夫教授を始め、建築家・教育者・研究者として著名な谷口吉郎教授・清家清教授（いずれも故人）のエピソードを臨場感あふれる語り口で、よく耳にしました。

筆者が名古屋工業大学において内藤昌先生の講義を受けたのは、一年生のときの建築概論、二年生のときの日本建築史、三年生のときの設計製図・住宅建築史でした。とりわけ日本建築史は、内藤先生の上司である城戸久先生（故人）が退官されて、一九七二年に替わつて教授となられ日本建築史を担当したばかりのときで、張り切つて講義ノートも作られたのでしよう、日本建築史の要点を的確に押さえ大変充実した内容の講義でした。休講は一度もありませんでした。その折の筆者のノートは、今日に至るまで続くかけがえのない知産となっています。また設計製図の教育に関しては大変厳しく、時間は一分たりとも遅れは許されず、エスキースチエックも厳格で、最後は一人ずつ講評していくのですが辛辣で的確な批評を多くの学生が受けるなか、友人の一人の作品を無言でさつと通り過ぎたことがあります。その友人の疑問に、先生は「これは建築家の○○の作品だから」と軽く言い放ちました。先生は瞬時にお見通しでした。とはいって、その友人は悪い点数ながらも合格となり、内藤先生の厳しさの反面、学生に対する温かさを感じました。



愛知産業大学提供

井物を出前していただきました。当時、ほとんどの学生が下宿生だったの
で、これは厳しいゼミの後の大きな楽しみでした。

また内藤先生は、大変な写真好きで、撮影・現像・引伸・焼付まで自ら行
うために学内に「歴史意匠実験室」と称して大きな暗室をつくっておられま
した。撮影・フィルム現像は失敗が許されないので、学生に手伝わせながら
先生ご自身がなされましたが、引伸・焼付、そして出来上がった写真の整
理・製本などは学生に任せられました。しかし、その作業たるや膨大な量で、
指定時間に間に合わすべく、徹夜で行うことも度々でした。撮
影も先生はプロ並みの水準で、
三五畳カメラは勿論のこと、六
メートルのゼンザ・プロニカ、四メートルのリンホフを持ち歩き、筆者
の学生のときは、五メートルから八メートルまで撮影可能なジナーを
購入されました。とりわけ大変

こうしたことが相俟って、筆者は内藤昌研究室の門戸をたたき、四年生・
大学院修士課程で薰陶を受けることとなりました。しかし、研究室での研究
教育は予想以上に厳格で、週に一回のゼミは欠くことがありませんでした。
そのゼミは午後半ばから始まり、学生と激論を交わしながら夜遅くまで続き
ました。この激論は、われわれ学生を一人前の上級生としてみていた裏返し
と考えられますが、そのときの先生のエネルギーは相当なもので、教育する
立場になつた筆者から今みれば、研究教育に対する強烈な熱意がなければ誰
しも真似られないものと思います。夜遅くまで続いたゼミが終わると、さす
がの先生も疲れたのか「腹が減ったな」といつて、大学近くの大衆食堂から

なのは屏風も含む大きな絵図の撮影で、仕上がり全体が均質になるように絵
図全体の露出が適正になるようにライティング調整を長時間かけて行いま
す。たつた数枚の絵図の撮影のために半日がかりのときもありました。これ
らの撮影機材の持ち運びは無論学生の仕事です。研究というのは、頭だけでは
なく体力も必要なことを痛感させられました。「体力も才能の一つだ」と
言われた内藤先生の言葉を、改めて思い返しました。

内藤昌先生の研究業績を述べると、次の四群に大別されるでしょう。

一 書院造の設計技術に関する研究

近世初期に完成し、今日の和風住宅様式に通ずる書院造の設計技術を、と
りわけモデュラー・コーディネーションの視座から分析する研究は、先生が
着手されるまでは皆無というほどありませんでした。これは先生の学位論文
「書院造における間の建築的研究」の延長上になるものですが、近世初期の
一流大工棟梁が著した建築技術書の中から書院造の設計技術に関するものを
全国的に収集し、その技術内容を明らかにするとともに、近世初期の代表的
書院造遺構約七〇棟の実測調査とその平面寸法の分析を行つて、大工技術書
の内容を遺構の上で確認し、わが国の住宅建築におけるモデュラー・コーデ
ィネーション、特に畳寸法を基準とする「畳割」技術の発展過程を明らかに
しました。この一連の研究成果は、「間」に関する「一連の研究」として一九
七五年に日本建築学会賞を受賞されています。

二 日本古典建築書の網羅的かつ体系的研究

中世末から近代初期にかけて著されたわが国の古典建築書（第一群の研究
において文献史料として用いた建築技術書を含む）を、特定の建築種別や時
代に限定することなく、三〇年以上にわたって全国的に悉皆調査・収集した

約八〇〇本以上の古典建築書を基本史料としています。そのとりあえずの内容は「大工技術書について」（『建築史研究』三〇、一九六一年一〇月）で発表されましたが、この論文は後進の研究者に多大な影響を与えることになりました。その後これらの古典建築書を、その内容から中世建築書・堂宇雑形・屋敷雑形・小道具雑形・規矩雑形・絵様雑形・儀式書・家相書などに分類し、それぞれ書誌学的考察および建築的内容の分析を行って、建築技術的系譜や歴史的変遷過程を明らかにし、最終的には当時の建築界において果たしたこれら古典建築書の歴史的役割を明らかにしました。この研究の一環として、法隆寺大工に継承された建築百科全書ともいべき『愚子見記』に関する研究によつて、一九九〇年に日本産業技術史学会資料特別賞を受賞しています。また、この研究を通して、共同研究者としての六人の弟子が工学博士の学位を取得しており、後進の育成にも多大なる成果を挙げています。

三 日本城郭史の研究

最終的には『城の日本史』として、古代の城から整理し、総覽・分析されました。中心は中世末から近世にかけての城郭史の研究です。従来、軍事的要素のみを強調していた日本城郭史研究に、人間社会の集住様態としての都市の性格を視座に入れ、都市的建築としての城が造られた日本史的意義を究明した点が高く評価されます。具体的城郭に関する各論としては、名古屋城・姫路城・安土城・江戸城・二条城・聚楽第・伏見城・駿府城他多数がありますが、近世城郭の嚆矢である安土城に関しては、静嘉堂文庫の膨大な整理蔵書の中から新史料「天守指図」を自ら発見し、これと『信長公記』他の文献史料、および安土城跡の遺構の実測調査を総合的に研究し、絢爛豪華な南蛮風唐様の天守を復元しました。その成果は、「安土城の研究 上・下」

（国華）一九七六年二・三月）・『復元安土城』（講談社、一九九四年）他にまとめられるとともに、天守六・七階内部がセヴィリア万国博覧会（一九九二年）日本政府館に原寸復元され、安土町（現、近江八幡市）「信長の館」に移築、外観を加えて展示されています。

四 日本都市史の研究

この種の研究成果の先駆としては、『江戸と江戸城』（鹿島研究所出版会、一九六六年）が挙げられるでしょう。今日では盛んな都市史研究ですが、当時としては希薄な「都市史」の研究分野に先鞭をつけた画期的な研究と考えられます。その後、洛中洛外図屏風や江戸図屏風をはじめとする諸都市図屏風を史料とし、その景観構成を古地図および現代地図に投影し、武家地・公家地・寺社地・町人地に大別して、地域別描寫建築数の統計的分析を行うことによって、都市の景観変化を明らかにしました。また、諸都市の古地図を史料として現代地図に投影し、用途区域別の面積の定量化や道路網の物理的・統計的分析によって、各都市の変遷過程を明らかにするなど、常にフィジカルなデータを用いた都市史の研究に独自の境地を開きました。これらの成果は、『江戸図屏風 別巻一江戸の都市と建築』（毎日新聞社、一九七二年）・『洛中洛外図大観』（小学館、一九八七年）他にまとめられています。

内藤昌先生は、以上のように、建築史学、とりわけ日本近世建築学の成立と発展に大きく貢献されました。その研究への熱意は強烈で、迅速をモットーとし、時に周りをはははらさせるときもありましたが、一途で真摯な研究姿勢には後進にとつて見習うべきところが多々ありました。こうした御功績の結果、二〇一二年に正四位瑞宝中綬章を受賞されました。ご存命であれば、まだまだお聞きしたいことがありました。残念でなりません。

(かわた かつひろ 名古屋工業大学大学院社会工学専攻)

故 内藤 昌 先生 年譜・著書論文目録

『内藤昌著述目録』（名古屋工業大学意匠計画学研究室、一九九三年）と
『内藤昌研究著述目録』（愛知産業大学、二〇〇七年）などを参照して作成し
た。報文と隨筆の類は割愛した。遺漏などあればご教示をお願いしたい。

年譜（学会および社会における活動は要職のみ記す）

- 昭和七年一〇月八日 長野県諏訪市に生まれる
- 昭和二六年三月 長野県立清陵高等学校卒業
- 昭和三〇年三月 東京工業大学理工学部建築学系卒業
- 昭和三二年三月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了
- 昭和三五年三月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程修了
了「書院造における間の建築的研究」にて、工学博士
- 昭和三五年四月 授与（東京工業大学）
- 昭和三六年一月 東京工業大学理工学部助手
- 昭和三八年四月 名古屋工業大学工業教員養成所建築学科助教授
- 昭和四〇年四月 名古屋工業大学工学部建築学科助教授（大学院兼任）
- 昭和四七年四月 名古屋工業大学工学部建築学科教授（大学院兼任）
- 昭和五〇年五月 「間」に関する一連の研究に対し日本建築学会賞（論文賞）を受賞
- 昭和五九年一月 日本建築学会学術理事（昭和六一年一二月まで）
- 昭和五九年六月 日本産業技術史学会理事（平成八年一月まで）
- 昭和六〇年一月 日本建築学会東海支部長（昭和六一年一二月まで）

昭和六〇年四月	名古屋工業大学大学院工学研究科博士課程担当	三月まで)
昭和六〇年七月	名古屋工業大学学生部長および保健管理センター長（昭和六一年六月まで）	名古屋工業大学大学院工学研究科博士課程担当
昭和六〇年一〇月	名古屋城整備基本構想調査会委員・技術調査部会長（昭和六一年三月まで）	名古屋城整備基本構想調査会委員・技術調査部会長（昭和六一年三月まで）
昭和六一年六月	「キリスト教伝道地における都市建築の研究」にて文部省在外研究	「キリスト教伝道地における都市建築の研究」にて文部省在外研究
昭和六二年五月	世界デザイン博覧会場関連駅等改修計画委員会委員長（昭和六三年四月まで）	世界デザイン博覧会場関連駅等改修計画委員会委員長（昭和六三年四月まで）
昭和六三年九月	特別史跡安土城跡調査・整備委員会委員（平成一九年三月まで）	特別史跡安土城跡調査・整備委員会委員（平成一九年三月まで）
平成一九年八月	東京工業大学工学部建築学科教授（併任）	東京工業大学工学部建築学科教授（併任）
平成一九年一一月	日本インテリア学会理事・歴史部会長（逝去まで）	日本インテリア学会理事・歴史部会長（逝去まで）
平成三年五月	「城と城下町の都市デザインに関する総合的研究」に対し中日文化賞（中日新聞社）を受賞	「城と城下町の都市デザインに関する総合的研究」に対し中日文化賞（中日新聞社）を受賞
平成四年一〇月	セヴィアニア万国博覧会日本政府代表	セヴィアニア万国博覧会日本政府代表
平成五年一月	日本建築学会副会長（平成七年一月まで）	日本建築学会副会長（平成七年一月まで）
平成五年一月	日本産業技術史学会副会長（平成八年一月まで）	日本産業技術史学会副会長（平成八年一月まで）
平成五年三月	東京工業大学停年退官（平成三年四月より名古屋工業大学が併任）この間、九州芸術工科大学・東京工業大学・日本女子大学・名古屋造形芸術大学講師を兼任	東京工業大学停年退官（平成三年四月より名古屋工業大学が併任）この間、九州芸術工科大学・東京工業大学・日本女子大学・名古屋造形芸術大学講師を兼任
平成五年四月	名古屋工業大学名譽教授	名古屋工業大学名譽教授
平成五年四月	愛知産業大学学長・教授	愛知産業大学学長・教授
平成八年六月	日本インテリア学会副会長（平成九年六月まで）	日本インテリア学会副会長（平成九年六月まで）
平成一〇年八月	名古屋城本丸御殿復元検討委員会副委員長（平成一九年三月まで）	名古屋城本丸御殿復元検討委員会副委員長（平成一九年三月まで）
昭和三二年	著作目録	著作目録
昭和三一年	「空間の表現としての「間」の建築的研究序説」	「空間の表現としての「間」の建築的研究序説」
昭和三一年	『日本建築学会研究報告』三七、一九五六年一二月	『日本建築学会研究報告』三七、一九五六年一二月
昭和三一年	「六尺五寸間の発生について（間の建築的研究・三）」	「六尺五寸間の発生について（間の建築的研究・三）」
昭和三一年	『日本建築学会論文集』五七、一九五七年七月	『日本建築学会論文集』五七、一九五七年七月
昭和三一年	「実測値を如何に考えるか？（一）（二）（間の建築的研究・一）」	「実測値を如何に考えるか？（一）（二）（間の建築的研究・一）」
昭和三一年	『日本建築学会研究報告』三九、一九五七年八月	『日本建築学会研究報告』三九、一九五七年八月
昭和三一年	「品川区における地面の変遷および分筆過程について」	「品川区における地面の変遷および分筆過程について」
昭和三一年	『日本建築学会研究報告』三九、一九五七年八月	『日本建築学会研究報告』三九、一九五七年八月
昭和三一年	「七尺間の性格について（間の建築的研究・四）」	「七尺間の性格について（間の建築的研究・四）」
昭和三一年	『日本建築学会研究報告』四〇、一九五七年一二月	『日本建築学会研究報告』四〇、一九五七年一二月
昭和三一年	「紀州藩の木材供給形態（江戸時代木材供給形態の研究その一）」	「紀州藩の木材供給形態（江戸時代木材供給形態の研究その一）」
昭和三一年	『日本建築学会研究報告』四三、一九五八年六月	『日本建築学会研究報告』四三、一九五八年六月
昭和三一年	「五箇山地方民家の柱間寸尺による考察（間の建築的研究・五）」	「五箇山地方民家の柱間寸尺による考察（間の建築的研究・五）」
昭和三一年	『日本建築学会研究報告』四三、一九五八年六月	『日本建築学会研究報告』四三、一九五八年六月

「甲良家の書院造木割書について」

『日本建築学会論文集』八九、一九六三年九月

「伏見城II—武家地の研究—（近世都市図屏風の建築的研究 洛中洛外図 その四）」

『日本建築学会論文集』一八一、一九七一年三月

昭和三九年

「桂離宮古書院の平面構成について」

『日本建築学会論文集』一〇三、一九六四年一〇月

昭和四〇年

「社寺・神社の様式、神社の木割、寺院の木割」

『建築設計資料集成 IV』、丸善、一九六五年二月

「戦後の建築史学の発達」

『近代日本建築学発達史』、丸善、一九七一年一〇月

『江戸図屏風—江戸の都市と建築』

毎日新聞社、一九七一年二月

昭和四一年

『江戸と江戸城』

鹿島研究所出版会SD選書、一九六六年一月

「日本のもののが感覚性・飛鳥から奈良へ・古代から中世へ・四神相應の地・城郭の構成」

『建築術』一空間をとらえる』、彰国社、一九七一年一〇月

昭和四二年

『新桂離宮論』

『江戸の町づくり』

『国華』九五九、一九七三年七月

昭和四八年

『江戸開府』、世界文化社、一九六七年一月

『江戸時代の建築』

『江戸の都市構造』

『江戸時代図誌四 江戸一』、筑摩書房、一九七五年二月

昭和四三年

『東海の明治建築』

名古屋鉄道株、一九六八年三月（城戸久主、飯田喜四郎他と共に著）

「肥前名護屋図屏風」の建築的考察

『国華』九二五、一九六八年六月

昭和四五年

『名古屋城とその城下町』

『日本の名城と城下町』、日本城郭資料館出版会、一九七〇年九月（島羽政雄編）

昭和四六年

『伏見城I—武家地の研究—（近世都市図屏風の建築的研究 洛中洛外図 その二）』

『日本建築学会論文集』一八〇、一九七一年一月

『岐阜県観光開発構想計画報告書』

『観光産業研究所岐阜県観光開発調査計画委員会、一九七一年三月（共著）

「伏見城I—武家地の研究—（近世都市図屏風の建築的研究 洛中洛外図 その三）」

昭和五一年

『日本の城』

『国民百科事典』、平凡社、一九七七年九月

講談社、一九七七年九月（西川孟写真）

『桂離宮』

『KATSURA』、『国際ブック・デザイン賞受賞』

（その後、一九七八年に仏語訳（一〇月）、独語訳（一二月）として出版）

「古河新兵衛覚書」系本の構成とその内容

『日本建築学会計画系論文報告集』三四九、一九八五年三月

「古河新兵衛覚書」系本における木割の特質

『日本建築学会計画系論文報告集』三五二、一九八五年六月

「元和創建日光東照宮の復原的考察」

『建築史学』五、一九八五年九月

『日本建築古典叢書五 近世建築書—座敷雑形』

大龍堂書店、一九八五年一〇月（小葉田淳・内藤昌監修、岡本真理子編著）

『日本名城集成 名古屋城』

小学館、一九八五年一〇月（編著）

「建築空間のイメージ分析—日本伝統建築における空間特性（その一）」

『日本建築学会計画系論文報告集』三五七、一九八五年一月

「名所の形体要素—江戸時代四都市における都市景観の研究」

『日本都市計画学会学術研究論文集』一〇、一九八五年一月

昭和六一年

『建築からの仕掛け』

学芸出版社、一九八六年二月（上田篤他と共著）

『江戸東京学—江戸の都市構造』

至文堂、一九八六年二月（陣内秀信他と共著）

『継手・仕口雑形の書誌と類型—継手・仕口雑形の研究（その一）』

『日本建築学会計画系論文報告集』三六〇、一九八六年二月

『高山城跡発掘調査報告書』

高山市教育委員会、一九八六年三月（代表）

「21世紀へ向けて」

『名古屋城』、名古屋市名古屋城整備基本調査会、一九八六年三月（代表）

「建築空間の知覚的特性による構成部材と構成要素の抽出—日本伝統建築における空間特性（その一）」

『日本建築学会計画系論文報告集』三六一、一九八六年三月

「いわゆる『木碎之注文』（寿彭覚書）における堂・社・門の木割体系」

『日本建築学会計画系論文報告集』三六一、一九八六年四月

「初期和算書における建築積算技術」

『日本建築学会計画系論文報告集』三六二、一九八六年五月

「建築空間の知覚的特性による構成部材の分類—日本伝統建築における空間特性（その三）」

『日本建築学会計画系論文報告集』三六二、一九八六年五月

『総覧日本の建築五 東海』

新建築社、一九八六年六月（共著、日本建築学会編）

「『愚子見記』における初期和算書の影響」

『日本建築学会計画系論文報告集』三六六、一九八六年八月

「近代建築の視覚的印象による意匠特性の研究」

『日本建築学会計画系論文報告集』三六六、一九八六年八月

「建築空間のイメージと構成部材の知覚的特性からみた日本建築の空間特性」

『日本建築学会計画系論文報告集』三六七、一九八六年九月

「『愚子見記』の成立」

『日本建築学会計画系論文報告集』三六九、一九八六年一月

「継手・仕口の基本型と変化型、複合型—継手・仕口雑形の研究（その二）」

『日本建築学会計画系論文報告集』三七〇、一九八六年二月

昭和六二年

『近代日本産業技術の実態調査及びその発展過程に関する実証的研究』

『産業技術記念物調査会、一九八七年二月（吉田光邦他と共著）』

『天下一の巨大都市』

『東京「江戸」を歩く』、毎日新聞社、一九八七年七月

『洛中洛外図大観—舟木家旧蔵本』

『洛中洛外図大観—上杉家旧蔵本』

『洛中洛外図大観—町田家旧蔵本』

『小学館、一九八七年七月（共著）』

『姫路城の造形』

『国宝への旅』、日本放送出版協会、一九八七年八月

『いわゆる『木碎之注文』（寿彭覚書）における木割体系の特質』

『日本建築学会計画系論文報告集』三七八、一九八七年八月

『街並みのイメージ分析—日本の伝統的街並みにおける空間特性（その一）』

『日本建築学会計画系論文報告集』三七九、一九八七年九月

『UNE GRANDE CITE DE L'ANCIEN JAPON EDO』

Albin Michel Jeunesse, Paris'、一九八七年一月

「江戸城」

『江戸東京学辞典』、三省堂、一九八七年二月（前田愛他と共著）

昭和六三年

『景観構成要素とその景観評価への影響—日本の伝統的街並みにおける空間特性（その一）』

『日本建築学会計画系論文報告集』三八三、一九八八年一月

- 「江戸建仁寺流系本の成立」　【日本建築学会計画系論文報告集】三八三、一九八八年一月
 「繼手・仕口雛形の歴史的変遷過程—繼手・仕口雛形の研究（その三）」　【日本建築学会計画系論文報告集】三八四、一九八八年一月
 「高山城跡発掘調査報告書II」　【日本建築学会計画系論文報告集】三八四、一九八八年一月
 「木割書系絵様雛形の系譜」　高山市教育委員会、一九八八年三月（代表）
 「景観構成要素とイメージとの関係—日本の伝統的街並みにおける空間特性（その三）」
 「復元日本大観—城と館」　【建築史学】一〇、一九八八年三月
 「世界文化社、一九八八年四月（編著）
 「加賀建仁寺流系本の成立」　【日本建築学会計画系論文報告集】三八六、一九八八年四月
 「幻の安土城」　【日本建築学会計画系論文報告集】三八六、一九八八年四月
 「藤吉郎一夜城を築く」
 「歴史への招待一六」、日本放送出版協会、一九八八年五月（岡本良一他と共著）
 「日本古典建築学体系の確立過程」　日本産業技術史学会『技術と文明』六、一九八八年五月
 『注釈　愚子見記』・『愚子見記の研究』　日本産業技術史学会資料特別賞を受賞
 井上書院、一九八八年六月（編著）
 「安土築城」　【天下布武】、第一法規出版、一九八八年六月（福田栄次郎他と共に著）
 「江戸建仁寺流系本の展開」　【日本建築学会計画系論文報告集】三八八、一九八八年六月
 「近世建築書における唐様建築の設計体系」
 「日本建築学会計画系論文報告集」三八八、一九八八年六月
 「「ブレ・モダン」立川流の建築」　【鶴舞公園奏楽堂復元調査研究報告書】　日本建築学会東海支部、一九九〇年一月（代表）
 「江戸建仁寺流系本の展開」　【駿府城学術調査研究報告書】　静岡市教育委員会、一九九〇年三月（代表）
 「横須賀城学術調査研究報告書」　大須賀町教育委員会、一九九〇年三月（代表）
 「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」　【建築史学】一四、一九九〇年三月
 「建築装飾バーネンブックの変遷その一—筆写本彫物書系絵様雛形の書誌的考察」　日本産業技術史学会『技術と文明』一〇、一九九〇年六月
 「姫路巾史第一四巻別編姫路城　姫路城の構成」　【日本建築学会計画系論文報告集】四一二、一九九〇年六月
 「姫路市、一九八八年七月（渡辺勝彦他と共に著）
 「日本建築の型と作法」　【日本建築の型と作法】
 「戦国の世の城づくり」　【歴史への招待八】、日本放送出版協会、一九八八年九月（脇田修他と共に著）
 「高山城総合学術調査報告書」　高山市、金森公顯彰会、一九八八年九月（代表）
 「作法と建築空間」、彰国社、一九九〇年七月（小笠原清信他と共に著）
 「日本のすまいとインテリア」　小原一郎・吉田光邦編『インテリア大事典』、壁装材料協会、彰国社、一九八八年一〇月（岡本真理子他と共に著）
 「The Annual Conference of Chinese of Urban Planning and Chinese, Japanese and Korean 1990, Taipei Symposium」、一九九〇年九月
 「日本建築古典叢書三　近世建築書—堂宮雛形（建仁寺流）」　大龍堂書店、一九八八年二月（小葉田淳・内藤昌監修、河田克博編著）
 「清朝以前台北市域の集落分布と市街形成」　【日本都市計画学会学術研究論文集】一五、一九九〇年一〇月
 「建築装飾バーネンブックの変遷その二—筆写本彫物書系絵様雛形の内容的考察」　
 「洋の東西からみた城の造形思想」　
 「建築装飾バーネンブックの変遷その二—筆写本彫物書系絵様雛形の内容的考察」

平成元年

「建築装飾バーネンブックの変遷その二—筆写本彫物書系絵様雛形の内容的考察」

- | | | |
|------|---|--|
| 平成五年 | 「名古屋の都市形成」 | 日本産業技術学会『技術と文明』一一、一九九一年二月 |
| | 『ボストン産業都市への選択「名古屋宣言」』 | 名古屋市新日本建築家協会、一九九一年三月（西尾武喜他と共著） |
| | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 | 大龍堂書店、一九九一年三月（小葉田淳・内藤昌監修、若山滋・麓和善編著） |
| | 『横須賀御殿学術調査研究報告書』 | 東海市教育委員会、一九九一年三月（代表） |
| | 『日治時代臺北市街路結構之分析』 | 中華民国建築學會『建築學報』第四期春期号、一九九一年四月 |
| | 『松坂城學術調査報告書』 | 松阪市、一九九一年九月（代表） |
| | 『日本植民地時代における台南都市構造の復原的研究』 | 日本都市計画学会会衆術研究論文集二六、一九九一年一一月 |
| | 『信長と安土城』 | 堺屋太一編『織田信長』、日本放送出版協会、一九九一年一二月 |
| | 『姫路・その城と城下町』 | 日本建築学会東海支部、一九九一年一月（代表） |
| | 『日本名建築写真選集六 姫路城』、新潮社、一九九一年六月（西川孟写真） | 日本建築学会会計画系論文報告集四四九、一九九三年七月 |
| | 『幻の城 安土城再現』 | 『日本建築学会会計画系論文報告集』四四九、一九九三年七月 |
| | 『信長天下統一の象徴』 | 『日本建築学会会計画系論文報告集』四四九、一九九三年七月 |
| | 『幻の安土城 天守復元』、日本経済新聞社、一九九一年七月（堺屋太一監修） | 『日本建築学会会計画系論文報告集』四四九、一九九三年七月 |
| | 『日本植民地時代における台北都市構造の復原的研究』 | 『日本建築学会会計画系論文報告集』四四九、一九九三年七月 |
| | 日本産業技術史学会『技術と文明』一四、一九九一年七月 | 『日本建築古典叢書八 近世建築書—構法雑形』 |
| | 日本産業技術史学会『技術と文明』一四、一九九一年七月 | 大龍堂書店、一九九三年七月（小葉田淳・内藤昌監修、若山滋・麓和善編著） |
| | 平凡社ブッククラブ、一九九一年八月 | 『江戸城大天守美術模型—ペーパークラフト』 平凡社ブッククラブ、一九九三年七月 |
| | 『日治時代高雄都市結構之分析』 | 『四天王寺流基幹本』（社記集）の内容的特質』 |
| | 中華民國建築學會『建築學報』第六期春期号、一九九一年八月 | 『華城城役儀軌』における石垣構築設計体系に関する研究』 |
| | 『日本建築学会会計画系論文報告集』四四一、一九九一年一一月 | 『日本建築学会会計画系論文報告集』四五〇、一九九三年八月 |
| | 『日本建築学会会計画系論文報告集』四五〇、一九九三年八月 | 『日本建築学会会計画系論文報告集』四五〇、一九九三年八月 |
| | 『日本建築古典叢書八 近世建築書—構法雑形』 | 『日本建築古典叢書八 近世建築書—構法雑形』 |
| | 大龍堂書店、一九九三年七月（小葉田淳・内藤昌監修、若山滋・麓和善編著） | 『伊勢神宮の建築』 『聖域 伊勢神宮』、ぎょうせい、一九九四年四月（西川孟写真） |
| | 『名古屋城、安土城』 『日本のあゆみ探検図鑑—日本の歴史編』、福武書店、一九九四年四月 | 『名古屋城、安土城』 『日本のあゆみ探検図鑑—日本の歴史編』、福武書店、一九九四年四月 |
| | 『日本・韓国伝統建築空間のイメージ評価尺度抽出—日本・韓国伝統建築空間のイメージ特性（その一）』 | 『日本・韓国伝統建築空間のイメージ評価尺度抽出—日本・韓国伝統建築空間のイメージ特性（その一）』 |
| | 『復元 安土城—信長の理想と黄金の天主』 | 『日本建築学会会計画系論文集』四五八、一九九四年四月 |
| | 『石垣築様目録』における石垣構築設計体系に関する研究』 | 『日本建築学会会計画系論文集』四五九、一九九四年五月 |
| | 『日本建築学会会計画系論文集』四五九、一九九四年五月 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 『構成部位・要素からみた日本・韓国伝統建築のイメージ特性—日本・韓国伝統建築空間のイメージ特性（その二）』 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 『日本建築学会会計画系論文集』四五九、一九九四年一〇月 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 『江戸のまちづくり無限拡大都市の誕生と発展』その都市としての歴史相 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 教育出版（ビデオ）四〇分解説書、一九九四年一二月 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 『日本建築学会会計画系論文集』四五九、一九九四年五月 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 角川書店、一九九五年六月（編著） | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 『ビジュアル版城の日本史』 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 『日本・台灣伝統建築空間のイメージ特性』 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 『日本建築学会会計画系論文集』四七五、一九九五年六月 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |
| | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 | 『日本建築古典叢書九 近世建築書—絵様雑形』 |

『工程做法則例』における（混合型）木割の設計技法（その一）—正樓・転角樓・築樓について—

『日本建築学会計画系論文集』五三九、二〇〇一年一月
『特別史跡安土城跡発掘調査報告一二』

滋賀県教育委員会、二〇〇一年三月（全体監修・上山春平他と共著）
「土地利用からみたスペイン都市の特性に関する復元的研究」

『日本建築学会計画系論文集』五四二、二〇〇一年四月
『日本町の風景学』

草思社、二〇〇一年五月
『工程做法則例』における（面潤・進深型）木割の設計技法（その二）—闇桟・倉庫・亭・小式について—

『日本建築学会計画系論文集』五四七、二〇〇一年九月
『日本建築学会計画系論文集』五四七、二〇〇一年九月

平成一四年
『特別史跡安土城跡発掘調査報告一二』

滋賀県教育委員会、二〇〇一年四月（全体監修・上山春平他と共著）
『建築書系道具・雑形の設計学理・道具・設計における寸法体系』

『日本建築学会計画系論文集』五五七、二〇〇一年八月
『日本建築学会計画系論文集』五五七、二〇〇一年八月

平成一五年

『中國古典建築書』『營造法式』・『工程做法則例』・『營造算例』における井口天花（格天井）の設計技法について
『日本建築学会計画系論文集』五六六、二〇〇三年四月

平成一七年
『木割書における多宝塔設計体系の研究』

『日本建築学会計画系論文集』五九一、二〇〇五年五月

平成一八年
『木割書における宝塔類の内容と分類』

『日本建築学会計画系論文集』六〇〇、二〇〇六年一月

平成二三年